

安齋隨筆

拾四

今川家赤より引綱之事

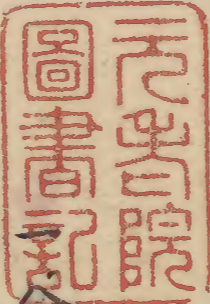
					和書門
			八九四八		
		一八九	函	號	
一六	三架				類

庫	文	閣	内	
五三	函	一六	八	和書
架	冊	號	類	

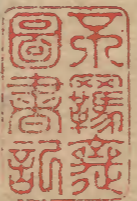
内閣文庫	番號	和	8948
	冊數	16 (14)	
	函號	153	294



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



今川家赤とく川調と半 瑞芬抄 是胡翁源右衛門



世間事尋ふと川調と半 瑞芬抄 是胡翁源右衛門

形跡を捕候 赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣

赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣

赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣

赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣

赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣

赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣

赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣

赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣

赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣

赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣 赤老福垣



一人形の着いりおの女の少神地り 少神地り 少神地り

少神地り 少神地り 少神地り 少神地り

少神地り 少神地り 少神地り 少神地り

少神地り 少神地り 少神地り 少神地り

少神地り 少神地り 少神地り 少神地り

少神地り 少神地り 少神地り 少神地り

造作ハタル欵正

正平革ノ紋猿獅子牡丹唐草梅バチアリ正平六年六

月一日ト書付アリ色ト地リ赤キモエキ紋色入組カラ其草梅

白シハ

一天平草是モ正平革ノ如ク猿獅子牡丹唐草梅ハチアリ

リ但弦走ノ料ニ中ニ不動明王コシガラセイタカア

リ是ニ天平元年八月十八日ト有リ〇地紋同前品右

一 天 平 革 七 正 平 草 七 弦 走 眉 庇 袖 ノ カ ム リ ノ 板 胸 板 二

用 ュ ヘ キ 程 ヅ 二 筋 ヲ 染 テ 細 ク レ キ リ ヲ 付 テ ア リ

其 筋 ノ 所 ヲ 裁 テ 鎧 ノ ソ レ ク ノ 所 ニ ヲ カ フ ヘ キ 為 ナ

リ 眞 大 少 キ ツ ル 走 ヘ リ 冠 ヲ 板 カ 形 其 敷 小 少 キ ナ リ ヲ 付 ル



一 春 流 の 後 の 事 京 都 将 軍 ノ 所 領 の 時 名 流 滅 天 龍 寺

以 成 の 時 小 童 の 坊 一 房 小 風 小 寺 至 天 龍 寺

流 滅 川 へ 流 一 寺 大 井 雅 川 面 白 寺 供 養 の 人 一 房

と 流 せ 一 寺 寺 後 五 山 の 寺 又 中 成 の 時 名 流 牛 流

書 七 建 一 寺 寺 後 五 山 の 寺 又 中 成 の 時 名 流 牛 流

の 間 小 必 願 流 一 の 屋 風 寺 寺 後 五 山 の 寺 又 中 成 の 時 名 流 牛 流

一 市 女 笠  一 市 女 笠 一 市 女 笠 一 市 女 笠

一 市 女 笠 一 市 女 笠 一 市 女 笠 一 市 女 笠

一 市 女 笠 一 市 女 笠 一 市 女 笠 一 市 女 笠

一 市 女 笠 一 市 女 笠 一 市 女 笠 一 市 女 笠

一 市 女 笠 一 市 女 笠 一 市 女 笠 一 市 女 笠

一 市 女 笠 一 市 女 笠 一 市 女 笠 一 市 女 笠

あしそとていへばことと云はれ候多ふよしとて此處に云
机に腰のふくまを長そくせしり 神茶抄

一 類とに角とせしり 柳葉の通と云お撲のせしりと告あてし
昔いふふみひのおとを丸らふかぬきしし とい記の如く同

一 淨瑠璃十二段水信右衛門小野通如し 一 記考者如云
次 柳葉御前人の盲人十二段と通如し 傳(史)なり 一 中
後六字南江(魚)と云右の海蛇の狗と云と云のと云

一 中 舟子小舟後舟舟北前江戸薩摩りり 薩摩又全平
の儀方、圓法系 海方お象文と云り 七 伝がし

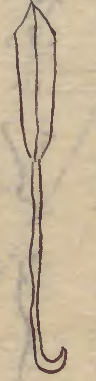
一 中 舟子(舟)と云るは是はつり投と云るは投也
ぬと云るぬぬと云るよし 舟子の方と云



舟子(舟)と云るは是はつり投と云るは投也

一 節 遠中括て明りあつりまを括りて果のこしり

一 一 つりあし矢取と云ん時、内より不入と云る編て法なり
目七目取し

一 一 ンしお港  セニイト云 目貫元しまづ先とま

一 一 けて目貫元と云ん 三 糸杭 派治の儀 世々と云ん
一 首級そと取て 壽と揚し 泰よりぬきし 款乃そ

一 一 ぞりんたる者、一 級と揚し 泰の時乃法なり 扱そ
級と云

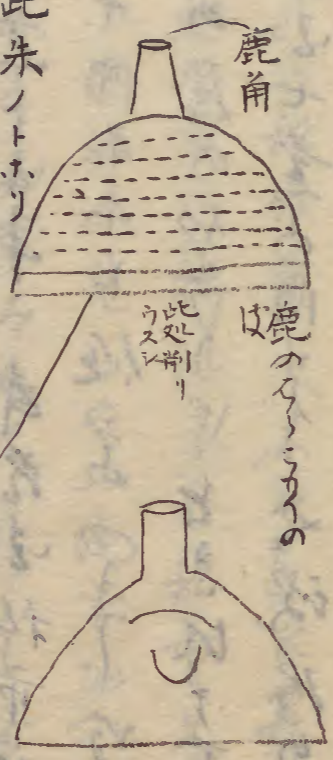
一 一 けり草と、一 佩楯の力草の下乃一 又 家の草と云
り也

一 一 證、一 洞と云、一 糸、一 三枚後、一 四枚、一 余の、一 二、一 大ての
けと云

一鞍の居方より作り及ハズ及さるる合款及少ては
 け又ハ火のうまきり前の火を以て時ハ火出で縄
 とこぎ〜切す

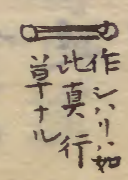
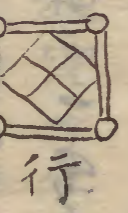
一胡の派原山科家ハ胡の字と右ハを先矢ハ胡の方と
 しく扱ハられし言々象ハ根の事と右うてまハ
 山ハ是根とらうてめ〜（うれんじとろ）物ま〜
 堂上ハの胡派外〜山科の流ハ程可〜
 一古の肩衣ハ〜山科の流ハ程可〜
 衣と着ハ今ハ高ハ流級〜〜ぬ肩衣と用ひ〜
 是〜

一鹿笛の図 鹿笛の付次〜鹿の形と似せ〜



此朱ノトホリ
 皮ヲカケフサク此取ニ糸
 ラワラシテ合目シメル

一鞍こま真ま行ぎやう草くさ



此所蛤貝ヲ合タル如シ其間ニハハラコモリノ
 ウス草ヲハサムソレニヒ〜キテナル〜音細ク
 高リヒウトナル鹿ノ音ノ如シ

豆州熟海温泉入湯の付狩
 人取物の西家セ〜
 裏の方ハ鹿角〜表ハ鹿の腹
 毛皮〜

竹シハリト云
 作シハリト云

一騎馬こまと云ハ陰囊の玉とぬき〜
 如るの〜

一え派十六九月〜

一 当付の家お小りんあんと云いびくうとふふて包らるし
片のごさ包ハ 瀨辺と云 八重根居水戸ハ 川入薬ハ 付
引引小サグス ぢりんぎん ぢりんぎん ぢりべと次身
あけりえ切とハ 薬のわくわて居根の上ハ 様と云く
あけり

一 鹿垣 麻屋地ハ 臥を付角と云い臥を是より入て麻
うきと云 唐の書ハ 小みえりくと云る説

一 昔の標榜ハ 人のゆくゆみて新のえへ する酒ハ 標言を
し今ハ 腰ひらき 標ハ 古田 標神のあぢあて 近
代の作り

一 とうのぬの事 延在式の中ハ 天照右孫 四宝押ハ 左カ柄
鳥のぬりくまると云く 鳥のぬとハ 啄木ノ組ハ 今左カの

一 葉は月之白く説

一 旗地乃火蓋の旗の中と 空より火のふと斗又ハ 雨ハ
時膏と云く 卯ハ 雨申の仕敷ハ 秘すし 又火繩附
の穴ハ 繩ハ 何方と云し 沙ハ 秘す小りあまを 旗地
ハ 油と云りてハ ありあおし 野山へ出るハ 油と云く
あま 油と云く 入るハ ありあおし 又赤裏のらるんハ 入るハ ありあおし
のありハ ありあおし 又まは 旗と云く

一 旗地のうくちの上的穴ハ 旗中線者と云く
一 赤地ハ 黒黄の二色と云く 帯と云く じ原巻の巻ハ け
二色ハ

一 芳の太刀の身ハ ぬき穴ハ 小りく 七の刀と云く 一 括

一 刀疵の名

一 刀疵の名 月端 是る也 齒切 齒のけ アニ

一 フクリレ 悪目 焼ワレ ムノ金 シナへ 菅蒲折

一 カナシニ付又 アブラシニ

一 天下三腰 正宗 義弘 吉光

一 ナ、ミモノ 是ハ元来蛮物ニテ蛮名ニシテラト号

一 シ鉄ヲ一寸四方ホトフ、ニ切り身内へニトウ様ニ

一 仕立タリ蛮國ノ着籠トニエタリ今云ナ、ニ具足是

一 ナリ百ヶ条

一 鞍馬鉾ト云フハ毘沙門鉾ト云フ一ハ異國ノ製ノ鉾

一 人物名ニ百ヶ条

一 具足と希ハハ常の小神と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 一 刀疵の名と云フハ 具足と希ハハテ希トシテ後ハ

一 烟丸七の具名の通してつくつひきし小ざり毛川小
しと烟を川口を成丸と云し

一 杏葉ハ鵝尾の板せんたんの板の黒製じ

一 障子の板ハ錦畫の上よりハ鵝尾板ハ石の桐川の上

ハ竹の千たんの板ハ石の桐川の上よりハあしと

ハあし御つし

一 田池一及二百三拾坪ハ一年二百六十坪民の食より

石岡寺去一坪と二坪より定福寺去徳寺五尺八寸定

と云

一 京間を名ハ二ツ尺守あひの石二尺田舎五尺寸すし

一 ずらの物皮の及ハ小しと云ふつし

一 鵝尾板長七寸すし小ハ御長七寸すし小ハ御中七

より千旦の板と云

一 櫻木出所 天草上 日向中 不七他を以流り

重ハあしハ然地盤をといらハ櫻と云地ハ

不葉内ハ天草の流りハ

トけハ伊豆のふりハ

一 白塩崎山 奥列相馬 極上京 和列 極上 河内 極上 次

丹波 極上 次 武列 秩父 下 但多 出 上 列 生 上

一 太刀のさやよりハ老と云ふハ

身たる石刀ハけの草と云ふハ

一 陳羽織 日 大阪 織 具 是 以 成 又 上 下 の 場 以 て

号ハ時用ハ板倉園防々法流人の羽織の品と云ら

る

とたり又うぬろ振る物ふとをきく時日候と
一 用ひ

一 禮の大神とけり、その令ゆと、相類と云

一 一のりきと、その小、耳草一味能酒とて、扱て飼へ

一 ^{夏文、神、ニ、ア、リ}の口、天の語の下の息、虫の穴、す、掃と、赤、然、と、代

一 ナ、名、付、と、云、ラ、免、サ、ル、ノ、繩、ニ、和、以、波、ニ、白、然、ヲ、付、テ、曹、ニ、拜、也、ト、云、ス、物

一 ル、コ、ハ、セ、ヲ、付、テ、和、也、ト、云、ス

一 かり、草と云、脛、梅の力、草の下の一、又、草の奉と云

一 禮の胸と云、糸、云、枚、後、ハ、四、枚、す、余の、名、ハ、た、て

一 ウ、ゲ、と、云、ハ、シ

一 覽、言、又、箇、言、と、書、小、き、け、ら、め、う、し、今、も、祿、吉、後

一 秋の、時、は、そ、ふ、入、り、う、と、う、て、者、ふ、て、讀、も、帯、ふ

一 どの、時、定、命、ふ、と、入、事、じ

一 名、に、べ、そ、う、と、せ、ん、ト、小、き、と、と、し、弓、と、半、う、七、ト、ハ、オ、

一 ナ、リ、草

一 滴、ま、を、い、今、云、う、を、ぐ、ま、じ、今、云、ぬ、ニ、藍

一 ○、^{真、丈、云、ハ、フ、タ、ア、色、ト、ハ、言、キ、シ、ウ、ア、ス、キ、モ、今、ア、井、キ、ト、云、}

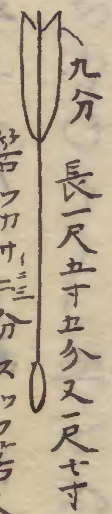
一 着、込、象、牙、の、目、あ、ん、と、い、く、た、る、よ、

一 鞭、うち、頼、政、家、某、度、敷、火、桶、打、波、波、政、如、け、五、字、治、川、後、敷、初、火、桶、打

一 一、甲、と、居、く、び、小、き、う、と、云、ハ、矢、と、名、ま、次、甲、と、か、り、の、け、小

一 う、と、云、勇、氣、と、り、う、る、河、り、

一 利満弓 弓長二尺八寸又二尺五寸

 九分 長一尺五寸五分又二尺五寸 羽長三寸 管ノカサ三分又ツツ管ノ 昔巻三分

とちうと九て家より縁返る事なり

一海驢 ニチカ 新名ナリ 隈波國竹島より今しゆの馬の二

品よりおぼふふゆゆ雲列の家中つて 毛皮とすめ
しと中意おせしふしんであめとくしとくすめやま

一西條あといふ小い棚の取がし加(あ)かきしつ

ういふし取のりより

一沖常家朔日十五、十八のゆれお仕しゆ朔、十五の昔よ

りより本七十八のゆれのゆり 権現様之ゆりゆり

時内家人皆ここの内我々を所く小居てゆく内家人の

岩門徒死のまに十八日す諸しとけしゆふしゆいでおい

深松煙とすつひし 君もゆ侍めしてゆ進をた

としゆゆして今も十八のゆれりしゆゆ朔、日のゆ

十五、八月のゆれ十八の星のゆれしとて十八のゆれし

上古よりまの事ゆゆいあやまじ朔朔望十五

是れ和漢より小上よりまじ

一幕乳十八、十八宿よりとる せゆ小牛宿よりゆり乳と

除くゆ一流のゆりゆり日お小い考ゆゆのおゆゆとてお

小おゆまよりゆりゆり申ゆえゆ火災小いゆりゆり

牛宿よりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

是徒ゆゆ又感小いゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

とゆり

一ゆりゆりゆりの紙のゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

そととこ此こして多由少し用ると云ふて其の

一持額 唐のちんまきし顔のりる不令ぬりし字もし
一説のりる竹の宿丹死の付母衣の波をその供とす源氏
又縄と輿不替てりる竹の宿丹結竹の定をそのりて云ふ
秘しゆりる竹の宿丹奥州

一馬の家をまひる竹宿りし神とてより是とありし縄
おてりるそのりし秘中の秘じづんくと云ふし
一山鳩の背もえ本をひてむゆきりし依に鞠唐と山鳩を

一山鳩の背もえ本をひてむゆきりし依に鞠唐と山鳩を

とよ

一夕ラレ万葉ニ八隅知之我大王乃朝庭取撫賜夕庭伊

縁立之御執乃梓弓之奈加弭乃音鳥奈利朝獵尔今立
須良思暮獵尔今他田諸良之御執梓張弓之奈加弭乃
音鳥奈利

一見聞諸家紋帳ニ奥書立雪斎ト云人の安藝毛利家人
繁澤氏ニ其時代ノ故実者ニ

一田のええの時塚をりしと五合先有附ハ五六三十と云れ
え一及して千房りて立てニ計れと米小る人ハ六と
けて何れりてもるありし六合あれんニと云ふ并と
る人ハ

一うさきの妙し一味粉りて探り使もる者ふるめて用妙し

一 大判の事

一 金座申立 権現権中代又源二己午年神々令浪

改と作身同口口江戸濱河而亦一七小判極之令令

位小判極之同日申出申出申出申出申出申出申出

光次判と光記申出申出申出申出申出申出申出

右是申出申出申出申出申出申出申出申出申出

分判神々申出申出申出申出申出申出申出申出

梅山系七年中申出申出申出申出申出申出申出

令判と右は分一令之申出申出申出申出申出申出

一 大判 後後申出申出申出申出申出申出申出

一 大判 後後申出申出申出申出申出申出申出

一 大判 後後申出申出申出申出申出申出申出

一 大判 後後申出申出申出申出申出申出申出

一 大判 後後申出申出申出申出申出申出申出

一 大判 後後申出申出申出申出申出申出申出

一 大判 後後申出申出申出申出申出申出申出

一續日本紀卷三文武天皇慶雲四年甲子給鐵印于攝津
伊勢等二十三國使印牧駒續

一出雲唐明珍久奈云名祖山守宗介書と傳りて
時奉王のつまよ 珍めしとまうしう 明珍と名しれ
う徳色と山守書とりし

一在平八郎死去の時追版をうし家臣に大谷之平と
よし士しその名録に又追版切し時傳せふ

一昔に雪限の松宮とありてありてその名に則と云ハ
死とありて死とありてそは名に傳りてありて

一昔に中山の山の上ふふ河と並まきとて川の上ふ家と
傳りて川と川へ流るし後架とよ家の後よかまよ
よし黨とありてとこととありてふのそは名に傳りて

虎ふと云ハつこのゆじ

一享保十七年の以 將軍系御尊即ちて 御成りてふ

以小納戸松ト作笑も度 御供ありて早朝と御ふ不補
まの土ふふ御成りて 御成りて言上せりて

一上るふそのふ人魂ありてと云ハ御成りて
くをるふと御成りてと云ハ御成りてと云ハ御成りて

一上るふそのふ人魂ありてと云ハ御成りて
小又斗下の土中又弟炭物と云ハ御成りて赤土のと云ハ

一内と進在太師及小宮と云ハ御成りてと云ハ御成りて
松柏をふみせりて人魂と云ハ御成りてと云ハ御成りて

一今也と云ハ御成りてと云ハ御成りてと云ハ御成りて
必そと云ハ御成りてと云ハ御成りてと云ハ御成りて

と入ふと云々人為経ふ云々武事経練の人々

一 爲時ハ初動て下より身と入る事おし

一 舟と云地伝名の時ハ舟に舟と云舟と云

舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 後舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

一 舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云舟と云

花し

一食せらるゝ肌を法串材とのりのこゝろをばこき
かひのこゝろを極ゆるの大丸小丸一胡山の時二之丸目
切を一日の食ゆる物しをこゝろの時三餅米し不若し又
之を合てしき

一酒と樽原をこゝろのこゝろを酒と即ち酒を
とほふつけりこゝろを酒と即ち酒を
と用ひ付小刀少くお湯く湯少くも少くも入吞
酒小粒といふいせせて又とほと浸し
一飯とちやたぐも竹の首ふ米ふ二品入あがも能く
て道と四ら一火少てゆふし米い首一入い魚
水一入入一く首の口いせんとせんとせんと

一湯とちやたぐも竹の首ふ米ふ二品入あがも能く
の口と色に飾少く紙のまじりと流てうつ存し飯
方と炭火少くゆふ。抄紙ハ飯入
一矢のねらぶいと云いねのきくたふねよらせりふとの
こゝろをねら一らふるといね一ツふるといし雑ぬいね
切をゆふちりすもれにね風やいふふあふりうた
と一ハ
一ツキレ一ツサレ
三ツキル三ツサレ
いハソキカラスツモキト云
又とちやたぐも竹の首ふ米ふ二品入あがも能く

葉かえ

一弓いたい及上ホす八分下ホす五分をぞきす二分下
分〇弓七尺五寸矢ホ尺七寸五分皆我々のす大し右小
まとうらのひつめ及ちをいすのす少くす

一揚弓福友の老柳いたわ及のせがとちやたぐも竹の首ふ米ふ二品入あがも能く

ひとてうらひいして二反りふか辰令月と又是と待
の喚びうらふ又方とありは歌の後の句より出て
云ひしむるし

一和歌と埃埃とよと歌とうとつけてうらふし
花鳥井冷泉泉おきてふたをせまふし曲名はまふし

一唐詩でも詩ふうとつけてうらふし唐詩でもうた
みしそのうらに平上去入の字をふらうてうらふし
あふしうらふ時のうらに平仄韻字のかまふと
うらふらふし此とよと不遠へうらうてうらふし
うら平聲の聲の調子たうらうてうらふしせう
うら声と長くうらうてうらふし去多うらう

声のし入多うらうてうらふしつといたと
うらうてうらふしつといたと
うらうてうらふしつといたと
うらうてうらふしつといたと
うらうてうらふしつといたと
うらうてうらふしつといたと
うらうてうらふしつといたと
うらうてうらふしつといたと
うらうてうらふしつといたと
うらうてうらふしつといたと

原若のひあふと(一) 平声
上声 去声

一唐土歴代ノ夏唐土ニテハ天子一姓ニアラヌ他姓
人或ハ禪ヲウケ或ハ天子ヲ討テ亡國ヲ奪テ天子
トナリテ國号ヲ改ルル日本ニテハ神代ヨリツキ

テ一姓ノ天子ナルユヘ國号ヤ一ト、云ワタヘテ改
ル夏十キシ
○帝堯ヨリ以前ハ國号サダカナラヌ惣テ代ノ名ト
云國号ノ夏シ
○代 唐 帝堯ノ時國号ヲ唐ト云
○虞 堯天下ヲ舜ニ禪リ玉ヒテ舜ノ時國号ヲ虞ト
云唐虞二代ト云
○夏 舜天下ヲ禹王ニ禪リ玉ヒ禹ノ時ハ國号ヲ
夏ト云
○殷 禹王十七世ノ孫桀王悪行アリシニヨリ湯王
桀ヲ亡シテ立テ天子トナル湯王ノ國号ヲ殷ト云○
殷ヲ商ト云

○周 殷湯王三十世ノ孫紂王悪行アリシニヨリ武
王紂ヲ亡シテ立テ天子トナル武王ノ國号ヲ周ト云
武王十二世ノ孫幽王ニテヲ西周ト云平王都ヲ東都
ニ移ス是ヨリ東周ト云合七主三
○戰國 秦 秦始皇帝周ヲ滅シテ天子トナリ國号ヲ秦ト
云
○周ノ末ヨリ秦天下ヲ取ル間ヲ指シテ戰國ト云
○前漢 秦三世ニテ亡ヒテ漢ト國号ヲ改ム漢高祖
天子トナル漢十三世ニテ王莽ト云人天下ヲ奪フ是
ヲテヲ西漢ト云又前漢ト云
○後漢 光武帝王莽ヲ亡シテ又漢ノ世トナス是ヲ
東漢ト云

○三國 後漢十二世ニテ魏ノ曹操蜀ノ劉備吳ノ孫
 權天下ヲ争ヒ取ラントス此時ヲ指テ三國ノ時ト云
 ○魏 曹操遂ニ天下ヲ取リテ国号ヲ魏ト云
 ○蜀 蜀ハ二世ニテ魏ニ降参シ魏ハ五世吳ハ四世
 ○吳 吳ハ共ニ降参シテ晉ノ世トナル是ヲ西晉ト云
 ○東晉 西晉四世ニテ亡ヒ晉ノ元帝立リ是ヲ東晉
 ○宋 東晉十世ニテ劉裕天子トナル是ヲ宋ト云
 ○齊 宋八世ニテ齊ノ世トナル五國國号成國ト云
 ○梁 齊十世ニテ梁ノ世トナル

○陳 梁四世ニテ陳ノ世トナル 兼獨談云六朝ト云ハ吳東晉
 ○吳 東晉宋齊梁陳ヲ六朝ト云 宋齊梁陳ノ六代ヲ云三國ノ
 ○隋 陳五世ニテ隋ノ世トナル 時ヨリ金陵ニ都ヲ定テ陳ノ
 ○唐 隋三世ニテ唐ノ世トナル 是ヲ李唐ト云 代ニテ六代ナル故ニ六朝ト
 ○五代 李唐廿一世ニテ也ヒ其後ニ後梁二世後唐
 四世後晉二世後漢二世後周三世此間ヲ五代ノ時ト
 云又五李ト云
 ○宋 是ヲ趙宋ト云五代亡ヒテ宋ノ世トナル
 ○元 宋十八世ニテ元ノ世トナル
 ○明 元十世ニテ明ノ世トナル
 ○清 明十九世ニテ清ノ世トナル今ノカラノ国号
 十ノ十ハ資治通鑑歴史綱鑑見テ考知ル

一 經書ハ 四書 五經 六經 十三經
 一 四書ハ 論語 大學 中庸 孟子
 一 五經ハ 詩經 書經 易經 春秋 禮記
 一 六經ハ 右ノ五經ニ樂記ヲ加フ所記今ハ已テ今礼
 記ニ少残り
 一 十三經ハ 孝經 論語 孟子 毛詩 尚書 周易
 春秋 左氏傳 公羊傳 穀梁傳 周礼 儀礼 礼記
 尔雅
 一 論語 四書ニテハ朱子ノ註十三經ニテハ何晏ノ註
 一 大學中庸本ハ礼記ノ中ニアリシヲ程子別ニ出セリ
 一 孟子 四書ニテハ朱子ノ註十三經ニテハ趙岐ノ註
 一 左傳ハ左丘明カ傳タル也春秋ノ傳ナリ

一 穀梁傳ハ穀梁赤カ傳フル也春秋ノ傳也
 一 公羊傳ハ公羊高カ傳フル春秋ノ傳ナリ
 一 詩經ハ孔子ノ集クニヒシヲ毛萇ト云ク人傳ヲ作りシ
 一 尚書ハ上古ノ事ト云義也書經ノ事也
 一 周易ハ易經ノ事也周ノ世ニテ撰レシ書也爰易トテ
 陰陽五行ノ变化セシ道理ヲ説キ占ニ用ル書也世俗
 ノウラナヒノ類ニアラス

一 廿一史ハ支那ノ代々ノ記録ナリ
 史記 遷 司馬前漢書 班固 後漢書 范曄 三国志 陳壽 晉書 唐

宗 何宋書沈約南齊書 蕭子梁書姚思陳書 同上北魏書
魏 收北齊書李百周書 德作孤南史李延北史 同上隋書魏
作 唐書歐陽五代史 同上宋史脫脫遼史 同上金史同上
元 史王禕明史 明史加行世二史 同上
一 子類ト云ハ 老子列子 莊子 楊子 文中子 荀
子 韓非子 墨子 孟子 管子 淮南子 孫子
吳子 尉繚子トトノ類ノ書ヲ云皆其人ノ名ヲ書ノ
名トレタルトリ右ノ諸子ノ中ニテ五品ニワカテ
リ 孟子荀子揚子トトヲ 儒家ト云管子淮南子トトヲ
ハ 雜家ト云老子莊子列子トトヲ 道家ト云韓非子
トトヲ 法家ト云孫子吳子尉繚子トトヲ 兵家ト
云 子類ヲ集メタル書二十九子全書二十九子品彙諸

一 子彙函トト云書アリ
一 集類ト云ハ 古人ノ文集ノ了文集ハ 屈原カ楚辭荀
侍中集沈記室集嵇散集トトヲ 始トレテ教フルニ違
アラズ諸ノ文ヲ集タル昏ニハ 梁ノ蕭統カ文選漢魏
百三名家漢魏六朝文集等アリ
一 新註古註ト云ハ 宋ノ世ノ學者程子朱子張子トト
云人ノ註レタル書ヲ オシテ新註ト云宋ノ世ト云ニ
二 アリ初宋ヲ劉宋ト云後ノ宋ヲ趙宋ト云程子朱子
ハ 趙宋ノ人ニ此時代ニ至テ儒學ノ風古代トハ變リ
アリタル説アル故新註ト云古註トハ漢魏晉等ノ世
ノ人ノ註ヲ云漢孔安國カ尚書ノ註魏何晏カ論語
ノ註晉郭璞カ爾雅ノ註トトノ類ニ

一 學文宗流ノ夏古學朱子學陽明學等ハ漢魏晉等ノ
 世ノ學者ノ説ヲ用ルル古學ト云孔安國董仲舒鄭玄
 趙岐何晏トノ學文ヲ古學ト云
 一 朱子學又朱學ト云ハ宋ノ朱熹ノ説ヲ用ユルヲ云宋
 儒ノ學トモ云程朱ノ學トモ云程子モ朱子モ同説ノ
 人ナリ性理ノ學トテ人々生レテヨリ備リタル性ヲ
 明メ悟リテ道ヲ行フヲ云本然ノ性氣質ノ性ト云
 一 陽明學ト云ハ明ノ王陽明ト云ク人々學文ナリ專長
 知良能ト云フヲ説ク人々生レテキタル智慧ヲ
 養ヒソダテ云万莫ヲ行フヲ教メリ
 一 山崎流ト云ハ山崎嘉右エ門ト云フ人ノ學文ナリ敬

義ト名乗ヲ云ク閻齋先生ト号ス專朱子學ヲ貴テ人
 ヲ導ク此人後ニハ神道ヲ學ビテ名ヲ岳加ト改ム是
 ヲリ岳加派ノ神道ト云フヲ弘メテ道ト云ク神此人初
 ハ禪僧ナリシカ仏道ヲ整テ儒道ニワタリ神道ニ入
 テ終ラレタリ長生ナラハ諸道ニワタルヘキヲ僅三
 道ニテ終リタリ此流ニテハ詩作ルヲ甚イヤシメ
 ニクムト古ノ程子朱子ハ詩作ラナリシニヤ律ノ
 一 武備志大明茅元儀著二百三十日本考利器刀大小長
 短不同立名亦異每人有一長刀謂之佩刀其刀上又挿
 一 小刀以便雜用又一刺刀長尺者謂之解手刀長尺餘
 者謂之急拔亦刺刀之類此三者乃隨身必用者也其大

而長柄者擺道所用可以殺人謂之先導其以皮條綴佩
之於肩或執之於手乃隨後前用謂之大割○又有小裁
紙設機刀出於長門号兼常者最嘉又有作贄礼賀礼不
拘大小雖為刀其實無用○上等曰上草刀山城君盛時
盡取日本名島名匠封鎮庫中不限歲月揭其工巧謂之
上庫刀其間号寧久者更嘉世代祖傳以此為上○次等
曰備前刀以有血漕為巧刀上或鑿龍或鑿劍或鑿八幡
大菩薩春日大明神天照大神宮皆其形著在外為美觀
者○如匠人製造之精不論刀大小必於柄上一面鐫名
一面記字号以為古今賢否之辨鎗劍亦然
○鳥銃原出西蕃波羅多伽兒国仙未釋古者傳於豐州
造鳥銃一門價二十餘兩用之奇中別州無此妙

○制火藥亦得真傳用梧桐燒炭為領次取皎硝滾水煮
過三次硫黃擇明淨者為勻毒銃用藥二一多彈遠中四
季各有加減之方一統總按三彈橫直分發皆秘法也
○同書同倭夷慣為蝴蝶陣以揮扇為号一人揮扇眾
皆舞刀而起向空揮霍我兵倉皇仰首則後下欲未又為
長蛇陣前耀百脚旗以次魚貫而行最強為殿中皆勇怯
相參○魏志卷三十倭人傳曰兵用矛楯木弓短下長上
竹箭或鐵鏃或骨鏃
○歐陽文忠公全集卷十五日本刀歌曰昆夷道遠不復
通世傳切玉誰能窮宝刀近出日本国越賈得之滄海東
魚皮裝貼香木鞘黃白間雜鍮与銅真鍮似似銀金百金傳入
好事予佩服可以攘妖凶傳聞其国居大嶋土壤沃饒風

俗好其先徐福詐秦氏採藥淹留州童老百工五種与之
居至今吾玩皆精巧前朝貢獻屢往來土人徃々工詞藻
徐福行時書未焚逸書百篇今尚在令嚴不許傳中國舉
世無人識古文先王大典藏表貊蒼波浩蕩無通津令惑
激坐流涕鋪潑短刀何足云

○今按司馬温公集略亦載日本刀歌大同小異妖作妖
坑作用蒼波浩蕩無通津作嗟予乘桴欲徃字愚謂張鼎
思之博洽以日本刀歌為歐陽永叔之作然則後人誤入
温公集與其先徐福歐陽子以日本先祖為徐福者非也
○西朝平壤錄諸葛元曰七月十五至平壤安定館官未
定是夜賊至我兵遂乱倭衆多載鬼頭獅面官馬見之驚
退陷淖中不得起士皆卸甲下馬墜崖落窅入爛田中倭

飯逼及之七月十日元大明年萬曆二年韓也

○韃 万葉集云和銅元年戊申天皇御製歌

源俊賴詠賭弓歌敬大木抄賴一家集才九年雜百首賭弓

引十ヲス手束乃弓ノ矢ヲハヤニ韃音ニ的ノ鳴カ

ハスナリ

顯昭法師云左京大夫顯補子真卷弓ヲ用ニハ韃ヲ懸

云夫木抄ハ引十ヲストヤリ

續字彙補 韃未詳見呂氏春秋

○笏ヲ我朝ニテレト名ヲカヘタルハ骨ト云ヲ忌

テ心字書笏呼骨及音骨トアリレヤクト云ハ尺ノ美

心秋氏要覽曰唐顯慶年中勅差前融州黃水令王玄策

往西域充使至毗那黎城東北四里許維广居士宅示疾
 之室遺此墨石為之王策躬以手板縱橫量之得十笏故
 号方丈。○通鑑注笏周制也晋宋以来謂之手板。○書言
 故夏ノ註手板長一尺蓋取此義也。
 ○散樂カク散カク樂カク註カク手板長一尺蓋取此義也。
 ○散樂カク散カク樂カク註カク手板長一尺蓋取此義也。
 ○恩澤恩澤如如本本紀紀神神代代卷卷訓訓皇靈之威皇靈之威同同紀紀景行景行訓訓紀紀タタニニ
 天慶六年竟宴得大己貴大神矢田部宿祢公望久尔年
 氣芝保右能佐紀与利都多陪玖亩美太未農杖由蕃計
 輔曾宇礼之義之夕ニノフニハ御賜之殖ノ畧語ニテ
 神靈ノ恩徳ノ頼ムヘキヲ云ニ後ニ義ヲ博シテ御魂
 遊冬ト為テ鎮魂祭ノ事ト又奥義抄云曾丹ノ曾根ナ好リ忠

報ふいとむらみ報ふいとむらみのいりきのいりきをえをえのいりきのいりきをえをえ
 故ニ御魂冬ト云ニ所謂荷前奈シ又詞花集好忠たま
 マツノ年の終ふ成ふクマツノ年の終ふ成ふク少ヤス少ヤスと書クと書クしと書クしと書ク
 又万葉集十二月六日ノ歌 阿我農斯能美多麻多麻
 比豆波流佐良婆奈良能美夜故尔呼佐宜多麻波祢
 又拾遺集十二月晦日歌ニ 万葉集十二月六日ノ歌
 と君トヤと君トヤ我多我多の里ヤの里ヤ昔昔ままりりきき乃里 阿我農斯能美多麻多麻
 魂未見報恩經
 ○饒ニギハヤヒヲヲカカナナニニトト云云夏夏京都五条の天神の社京都五条の天神の社ハハ少少夫夫名名
 會會トト多多相相殿殿ハハ大大乙乙斐斐奈奈ハハククヲヲササトトシシテテ少少夫夫名名
 祇祇也也不不醫醫のの比比ととりりてて房房とといいヤヤ 禁禁殿殿のの所所とと明

して受とる事と教へたる事し其不承は其
分小本と供する者ありて本姓と多活の人小可子
分りしものともと勝候と云世は此物と云く勝と力
チンとる〇て候の題名ともありて本ハラケラと云
美根りし事候不用ふ白文を
〇或説京ニテハ春下ヲ擲ト云糕ハカチ造ル故力チ
ニト云知ハ語リ粉ヲ子リテ造ルヲ案ト云カチ
此説略ハ
〇矢入之矢制 忌部正通曰軍陣箭入時敵射返其矢
則矢利矣以山鷄蜂鷓鴣鷺羽取作箭用為秘密也〇山
鷄ハ闘テ不知死其性剛毅ハ蜂鷓ハ鷺鳥トテ其旁ヲ
賞スヘシ鷄ハ神武天皇ノ弭ニ瑞ヲ見ハ不鷺ハ日本

武尊白鳥ニ化シ給ヒシ下アリ右西条日本紀ニ見ヘ
タリ
〇神代ノ矛 上古ハ筑紫九国ヲ總テ日向国ト云元
明天皇和銅六年日向国四郡ヲ割テ大隅国ヲ置ク贈
於郡アリ 高千穂ノ峯ハ日向大隅ノ界ニ跨ル此峯
西ハ稍卑シテ火常ニ炎上ス火常峯ト号ス東峯ハ高
シ鋒ノ峯ト号ス山上ニ靈矛ヲ建ル是神代ノ古物也
此峯天孫降臨ノ地也天孫自ラ從ヘ玉ヲ所ノ矛也正
利曰矛長八尺許鋒横手ヲ施シ十文字ノ如シ鉄カ石
カ分チ難シ近世島津茂久其様ニ依テ新造シテ配立
之云々 右東西ヲ併セ名ヲケテ今ハ霧島ト云其峯
霧ヲカキ取シ日向国凡土記曰臼杵郡知浦郷天孫降

臨時雲霧冥晦不辨物色天孫乃拔稻穗散之四方忽聞
晴日是名曰千穗峯
○馬咬レタル者ハ其熱キヲ火ニテ燒カ如シ是イ
キレ苦シムモノナリ是ヲ治スルニハ柞ノスミヨリ
水ヲ吞シムヘシ忽熱去テ痛ニ軽クナル也扱スヘシ
菓ヲワキメ、ラカシ煎吞ヘシ疵ニハ菓子ヲカミク
必キ付テヨ
○甲ノ緒其外軍中着具ノ緒ノアテリハクニ留メオ
ク心カタクナリ結テ緒ノ端ノ方ヲ口ナヘ入レ口ナ
ヲ一子ジリテ又端ヲ口ナヘ入レ又口ナヲ子ジリ端
ヲ入ト如此スレハ云ツキノ如クナルヲソラホドケ
スレ口ナレ行騰ノ緒弓小手ナリ緒モ同

一鳴弦 日本紀雄略紀二十三年空彈弓弦於海濱上搜
神記曰楚王遊於苑白猿在焉王令善射者射之矢數發
猿搏矢而笑乃命由基由基撫弓猿即抱木而辨及六国
時更羸謂魏王曰臣能為虛發而下鳥魏王曰然則射可
至於此乎羸曰可有頃聞雁從東方來更羸虛發而鳥下
鳥

一萬葉集云梓弓凡引夜青之遠音尔七君之御幸乎聞之
好毛
一靱負 日本紀清寧紀靱負
一蘆藿 日本紀顯宗紀○蓋枝釣之莖屋根簣垣也
一胡床 倭名抄胡床此間名阿久良今按編座之莖也梁
瘦肩昔胡床詩傳名乃外域入用信中原定歌取已正文

斜鉢自平三才圖會搜神記曰胡床戎翟之器也風俗通
曰漢靈帝好胡服景師作胡床此蓋其始也今之醉翁諸
何竹木間為之制各不同然皆胡床之遺意也○日本紀
作胡床古事紀作吳床猶胡桃一名吳桃也
一鞍馬カガリウ日本紀欽明紀見夕リ推古紀作
飾騎莊馬鞍馬二字出史田叔傳

一日本紀欽明紀見夕リ推古紀作
飾騎莊馬鞍馬二字出史田叔傳
一日本紀欽明紀見夕リ推古紀作
飾騎莊馬鞍馬二字出史田叔傳
一日本紀欽明紀見夕リ推古紀作
飾騎莊馬鞍馬二字出史田叔傳

